岐阜県吉城郡宮川村

塩屋金清神社遺跡Ｂ地点発掘調査報告書

――― 村内遺跡発掘調査報告書 ―――

１９９９年３月

岐　　阜　　県
宮川村教育委員会

岐阜県吉城郡宮川村

塩屋金清神社遺跡Ｂ地点発掘調査報告書

岐　　阜　　県
宮川村教育委員会

序　　文

宮川村では、「伝統を守り、教養を身につけ、文化の高い村」をつくることを村民憲章に掲げて、村民一体となって、よりよい文化を創るために努力をいたしております。

近年の埋蔵文化財に対する関心は、国民的関心事といってよいほどの高まりを見せております。宮川村におきましても、貴重な発掘調査の成果が、新聞やテレビなどで報道され、考古学の研究者はもとより、広く一般の方々にも注目されるようになりました。

こうした耳目を奪う「発見」は、飛騨地域のみならず、日本列島の黎明期を知る上でも、貴重な資料であるといっても過言ではありません。

そのなかで、平成４年度に実施いたしました塩屋金清神社遺跡Ａ地点の発掘調査では、多量の石棒未製品が出土し、研究者をおどろかせました。

さらに加工用具である敲石が多く出土し、縄文時代の石棒製作址と確認されました。

平成５年度には、今後予想される各種開発に先立ち、石棒製作址の範囲確認を目的として、塩屋金清神社遺跡Ｂ地点の発掘調査を実施いたしました。

今回、Ｂ地点の発掘調査によって出土した遺物を、報告書にまとめ、ここに『塩屋金清神社遺跡Ｂ地点発掘調査報告書』を刊行するに至りました。

なお、文化庁・岐阜県教育委員会をはじめ、地元有志や研究者の各位から、暖かいご理解と多大なるご協力をいただきました。関係各位に対しまして、厚くお礼を申し上げる次第であります。

これらの資料が「飛騨みやがわ考古民俗館」に展示され、大いに活用されるとともに、今後の考古学研究がさらに進むことを念じ、序文にかえさせていただきます。

平成11年３月

宮川村村長　　石腰　保昭

例　　言

1．本書は、国庫及び県補助金の交付を受けて実施した塩屋金清神社遺跡Ｂ地点の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、岐阜県教育委員会文化課の指導により、宮川村教育委員会が実施したものである。
3．発掘調査は、平成５年８月26日から同９月27日に実施し、報告書作成にかかる整理作業は、平成10年度に実施した。
4．調査は、調査団と事務局で行い、事務局は、宮川村教育委員会が担当した。
5．調査にあたっては、林直樹（元宮川村教育委員会 埋蔵文化財調査室主任）の指導・助言を受けた。
6．本書の執筆は、小島功（宮川村教育委員会主事）が担当した。
7．本書の図版作成および編集は、河野典夫（宮川村教育委員会主任調査員）、小島功が担当した。
8．遺物の実測およびトレース・拓本は、佐藤晴美、佐藤美保子、谷畑千春、東百合子、森下美千代、山小瀬弘子、小島功が行なった。
9．本書に記載した遺跡付近地形図は、国土地理院２万５千分の１地形図（白木峰・有峰湖・飛騨古川・船津）を複製したものである。
10．遺物の写真は、有限会社フォトナオイへ委託した。
11．本遺跡の資料は、宮川村教育委員会が保管する。
12．本調査および本書の作成にあたっては、多数の研究者の方々から、貴重な指導や助言をいただいた。心から感謝申し上げる次第である。

凡　　例

1．本書に記載する遺物の実測図は、次の縮尺を基準とした。
　縄文土器・・・1／3、石器・・・2／3、1／3、1／6　石製品・・・1／3
　陶器・・・2／3、銭貨・・・2／3
2．赤色顔料の付着する石器は、付着部をスクリーントーンで表現した。
3．遺物には、遺跡の略称に続けて、調査年、グリッドおよび層位をそのまま記入した。
　たとえば、K-B-93 Q25Ⅲとあるのは、K-B（塩屋金清神社遺跡Ｂ地点）の1993年度調査、Q25区、第Ⅲ層から出土したことを示す。

目　　次

序　文…… Ⅰ

例言・凡例…… Ⅱ

第１章　遺跡の環境

第１節　宮川村の環境…… 1

第２節　塩屋金清神社遺跡周辺の環境…… 3

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯…… 5

第２節　調査の概要…… 7

第３章　層　序

第１節　基本層序…… 9

第２節　各層の分布と時期…… 11

第５章　人工遺物

第１節　縄文土器…… 12

第２節　石　器…… 16

第３節　石製品…… 26

第４節　その他の遺物…… 31

挿　図　目　次

第 1 図　塩屋金清神社遺跡付近地形図 …… 2
第 2 図　遺跡周辺地形図およびグリッド配置図 …… 6
第 3 図　調査区域図 …… 8
第 4 図　セクション図 …… 10
第 5 図　縄文土器拓影および実測図 1 …… 13
第 6 図　縄文土器拓影および実測図 2 …… 14
第 7 図　打製石斧・横刃形石器実測図 …… 18
第 8 図　磨石・凹石実測図 …… 19
第 9 図　台石・有縁石皿実測図 …… 20
第 10 図　敲石・赤色顔料付着剥片実測図 …… 21
第 11 図　スクレイパー・楔形石器実測図 …… 21
第 12 図　独鈷石・塩屋石製石棒実測図 …… 27
第 13 図　塩屋石柱状節理原石実測図 …… 28
第 14 図　陶器・銭貨拓影 …… 31

付　表　目　次

第 1 表　石器組成表 …… 16
第 2 表　打製石斧計測値一覧表 …… 23
第 3 表　横刃形石器計測値一覧表 …… 23
第 4 表　磨石計測値一覧表 …… 23
第 5 表　凹石計測値一覧表 …… 23
第 6 表　台石計測値一覧表 …… 24
第 7 表　有縁石皿計測値一覧表 …… 24
第 8 表　敲石計測値一覧表 …… 24
第 9 表　スクレイパー計測値一覧表 …… 24
第 10 表　楔形石器計測値一覧表 …… 24
第 11 表　赤色顔料付着剥片計測値一覧表 …… 24
第 12 表　独鈷石計測値一覧表 …… 29
第 13 表　塩屋石製石棒計測値一覧表 …… 29
第 14 表　塩屋石柱状節理原石計測値一覧表 …… 29

図　版　目　次

1．上：調査区遠景（西対岸より）
　　下：調査区近景（西より）
2．上：セクション（25列トレンチ南端：西より）
　　下：セクション（25列トレンチ北端：西より）
3．上：調査風景
　　下：独鈷石出土状況
4．上：縄文土器（Ⅳ期深鉢）
　　下：敲石
5．上：塩屋石製石棒
　　下：塩屋石柱状節理原石

第1章　遺跡の環境

第1節　宮川村の環境

岐阜県の最北端に位置する宮川村は、北側を富山県婦負郡細入村と接し、東側は岐阜県吉城郡神岡町、西側は同河合村、南側は同古川町とそれぞれ接している。村の中央に神通川の支流である宮川が、ほぼ南から北へと流れている。この宮川で形成されたV字型の峡谷は深く、南から順に小谷・森安谷・菅沼谷・打保谷・大谷・戸谷・洞谷などの支谷が東や西から合流している。

これら支谷は、断層脈に起因するものが多く、大規模な活断層として有名な跡津川断層をはじめ、これに平行あるいは直交・斜交する水無断層・杉原断層・茂住谷断層・菅沼断層・打保断層・ニコイ断層・無雁断層などの枝断層が走っている。

また、村の北西側には、宮川と平行して流れる万波川があり、宮川へ注ぐ支谷とともに、白木峰（1602m）・小白木峰（1436m）・漆山岳（1393m）・流葉山（1423m）・高山（1337m）・蕎麦角山（1222m）・ソンボ山（1193m）などの山地を源流としている。

宮川に面する箇所は急峻な斜面が多いが、標高が高くなるにしたがってなだらかな山並みとなり、万波高原やニコイ高原などの高原地帯が広がっている。宮川に沿って小規模の河岸段丘が点在しているが、現在の集落の多くは、こうした河岸段丘の上に形成されている。

縄文時代の遺跡も、大無雁・野首・西忍・三川原・打保・杉原など発達した段丘上のテラスに集中しているが、小谷・菅沼などの谷間にも小規模な遺跡が点在している（第1図参照）。

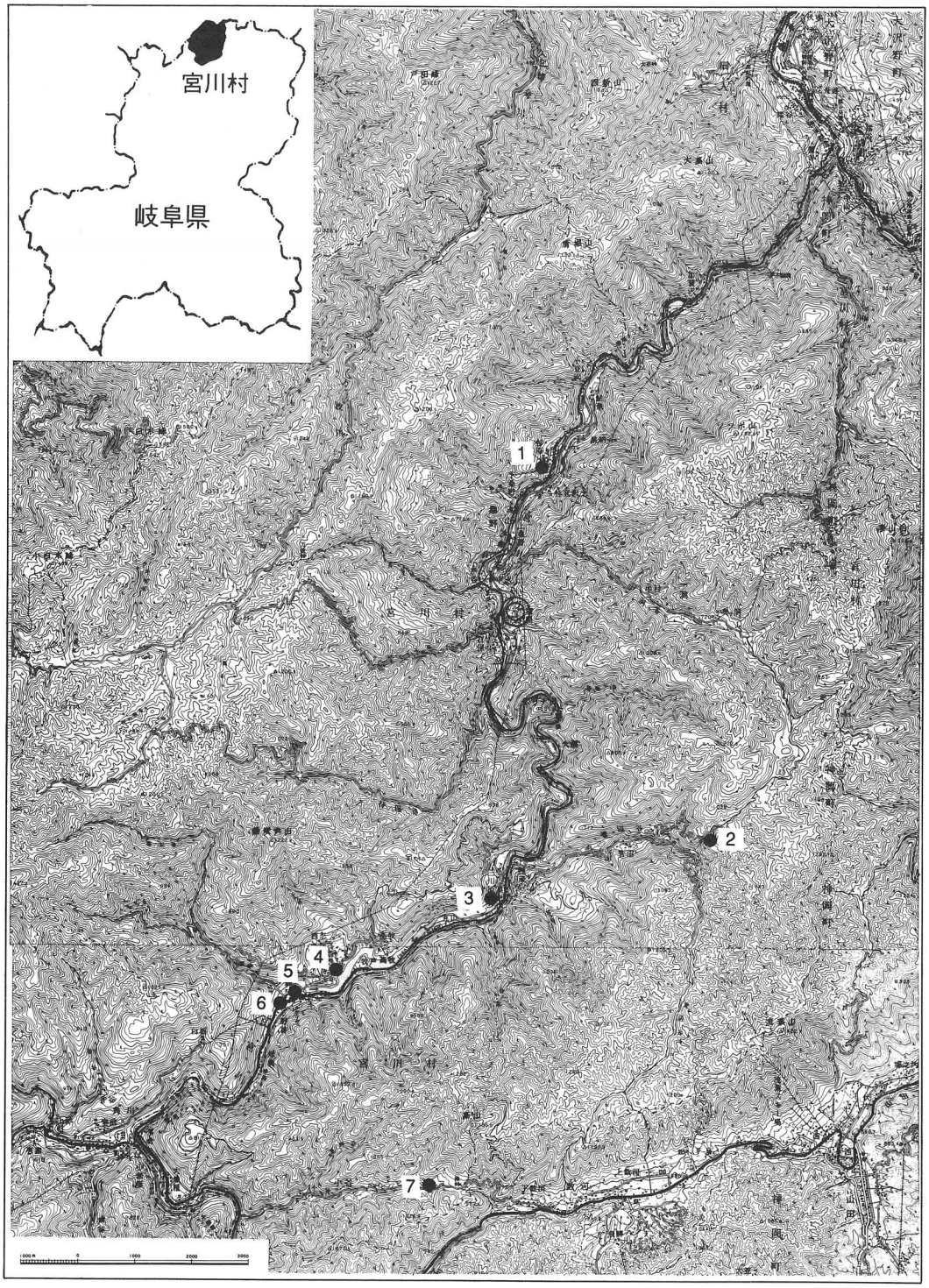
村の年平均気温は11.3℃、降水量は2000㎜前後である。より内陸にあって標高の高い地域と比較すると暖かな地方であるといえる。しかしながら、1年間の降雪累計が10mを超える豪雪地帯である。

宮川村の大地を構成する岩石は、日本列島最古の部類に位置付けられる飛騨変成岩類と、中生代に形成されたとされる船津型花崗岩類が主体をなしている。宮川の河原には、上流域に広く分布する濃飛流紋岩類や、手取層の砂岩・頁岩などの転石がみられる。チャートや玉髄も転石として認められ、石器の石材に利用されている。

宮川村は、富山県との県境に位置することから、その地理的環境によって、古くから飛騨・越中の交流ルートが形成されていたものと推定される。村内から出土する旧石器や縄文土器からも北陸地方の影響が強くうかがわれる。

江戸時代には、村内を縦走する越中西街道が交通ルートとして利用され、国境の小豆沢には、口留番所が設置されていた。同番所における嘉永2年（1849）11月の通行人調べには、138人が記載され、1日あたり4～5人の通行があったと推定される。

越中西街道は、中世の街道を再整備したものと考えられるが、古代以前においてもほぼ同様のルートが利用された可能性がある。現在、国道360号線バイパスの新設改良工事が進められているが、旧来からの国道は、越中西街道のルートと重なる部分が多い。



第１図　塩屋金清神社遺跡（◎）付近地形図（付：周辺遺跡分布）

１：杉原瑞穂遺跡、２：ニコイ岩陰遺跡、３：宮ノ上遺跡、４：宮ノ前遺跡、
５：家ノ下遺跡、６：堂ノ前遺跡、７：牛首遺跡

第２節　塩屋金清神社遺跡周辺の環境

塩屋金清神社遺跡は、宮川村の中では北寄りに位置する、大字塩屋に所在する。

塩屋地区は、塩屋谷と山ノ山谷によって形成された扇状地上に立地する。現在の集落の北端に鎮座する塩竈金清神社を中心に、縄文時代の遺物が広く散布する。

しかしながら、この扇状地の中央部は、大正３年（1914）の集中豪雨によってもたらされた土石流によって撹乱を受けているとみられる。聞き取り調査によると、塩竈金清神社を中心とする扇状地の北半分は、当時の土石流の被害を被っていないという。

神社の脇を流れる塩屋谷には、柱状節理のものを含む黒雲母流紋岩質溶結凝灰岩の露頭がみられる。この凝灰岩は、塩屋石と呼ばれ、近年まで砥石として利用されていたものである。遺跡からは、塩屋石を利用した石棒が多く出土し、古くから人々の注目を集めていた。

神社社殿には、この地より出土した石棒が安置されている。神社の創建年代は不明であるが、元禄７年（1674）の検地水帳には、大明神宮の記載がみられる。現在の塩竈金清神社は、明治10年（1877）に金清神社と塩竈神社が合祀されたものである。

金清神社の祭神は、多産の神・性の神として知られる皇産霊神（むすびのかみ）（伊邪那伎神）である。下半身に霊験あらたかとされ、現在でも多くの信仰を集めている。社殿の石棒は、男茎形神（おはせがたのかみ）と呼ばれ、神体として祀られているものである（1・2）。

塩竈神社は、宮城県塩釜市の塩竈神社の分社といわれる。塩釜市の本社は、漁業・安産の守護神として信仰され、全国に分社がある。山間部の地域では、安産の神として祀られ、長野県駒ケ根市東伊那塩田の「塩釜様」も安産の神として崇められているという（3）。

金清神社の石棒信仰と塩竈神社の塩釜信仰といった性に関連する信仰が、同一地域に存在していたことは、民俗学的にも興味深い。

明治初年の富田礼彦の『斐太後風土記』には、金清神社は、金勢明神・金精明神とも呼ばれ、十数個の石棒が祀られていたと記載されている。富田は、安置された石棒を「所々よりあつめられた自然石」と判断している。明治20年代になると、岡巌（4）や田中正太郎（5）によって村内の考古学的踏査が行なわれた。これにより、金清神社に安置された石棒が、石器時代の遺物として認識された。

昭和10年（1935）の飛騨考古土俗学会編『飛騨石器時代遺蹟地名表』には、塩屋から縄文土器・打製石斧・磨製石斧・石枕（御物石器）・独鈷石・石冠・土偶が出土したと記されている。出土地点や点数など詳細は不明であるが、このうちの土偶については、早川荘作（6）・林魁一（7）によって報告されている。

昭和41年（1966）の遺跡地図には、塩屋区の遺跡として宮ノ上遺跡と島遺跡が記載され（8）、昭和47年（1972）には、字ほそおさに所在する塩屋金清神社遺跡が追加された（9）。

昭和48年（1973）には、南山大学の小林知生・早川正一らによって塩屋金清神社遺跡（字ほそおさ）の学術調査が実施された。この調査成果の報告には、「石棒の製作に関する限り、材石の

供給源は眼前にあり、端的にいって石棒の製作に直接かかわる遺跡であるとともに、近在の同時期遺跡に少なからず供給されている可能性があるので今後の調査課題としたい。」と記述され、はじめて石棒製作址の可能性が指摘された(10)。

平成4年（1992）には、観光開発に伴って塩屋金清神社遺跡（字ほそおさ）の緊急発掘調査が行なわれた。発掘区のほぼ中央部からは、宮川本流へ向かう谷が検出され、これを埋める堆積層から、多量の未製品を含む石棒や加工具が出土した。土器の年代から、縄文時代後期前半を中心とする時期の石棒製作址であることが確認された(11・12)。

この遺跡で製作された石棒は、成分分析(13)や肉眼観察によって、飛騨地方や富山県内にも供給されていたことが明らかとなりつつある(14)。

なお、今回の調査区は、字宮ノ上に設定した。遺跡地図では、宮ノ上遺跡 21624－00036 として登録されている。しかしながら、塩屋金清神社遺跡 21624－00035、島遺跡 21624－00037 を含めた塩屋地区の3遺跡は、地形や遺物の内容などからみて、同一遺跡の可能性が高い。このためここでは塩屋金清神社遺跡の名称を使用し、塩屋金清神社遺跡Ｂ地点として報告する。

註

1）土田 吉左衛門編、1980：「本村の神社」『宮川村誌』、通史編（上）．宮川村誌纂委員会。

2）青木 自由治、1991：「祈りのすがた点描　石棒を祀る」『飛騨路の神ほとけ』、シリーズ山と民俗15．エンタプライズ社。

3）白井 祥平、1997：「タカラガイの信仰」『貝Ⅰ』、ものと人間の文化史83－Ⅰ．法政大学出版局。

4）岡 巌、1887：「飛騨の石器」『東京人類学雑誌』、3-21.

5）田中 正太郎、1894：「鹽谷の石棒」『東京人類学雑誌』、9-94.
田中 正太郎、1894：「飛騨の石棒」『東京人類学雑誌』、9-95.

6）早川 荘作、1940：「吉城郡塩屋出土の土製品」『ひだびと』、8-7.

7）林 魁一、1941：「飛騨塩屋発見の土偶」『ひだびと』、9-3.

8）文化財保護委員会 編、1966：『全国遺跡地図（岐阜県）』。

9）岐阜県教育委員会 編、1972：『岐阜県遺跡地図』。

10）小林知生・早川正一、1981：『岐阜県吉城郡宮川村塩屋金清神社遺跡 －石棒主体の縄文後期文化－』、人類学博物館紀要3．南山大学人類学博物館。

11）林 直樹、1992：「宮川村金清神社遺跡石棒製作址の調査概況」『どっこいし』、42.

12）林 直樹、1992：「柱状節理利用の石棒製作址 －岐阜県塩屋金清神社遺跡－ 」『季刊考古学』、41.

13）吉村 睦志、1995：「宮川村塩屋金清神社遺跡出土石棒の成分分析結果」『別冊 行動と文化』、3.

14）林 直樹、1995：「関連する村内遺跡 塩屋金清神社遺跡」『岐阜県吉城郡宮川村国道360号線バイパス改修工事に伴う発調査概報』、宮川村教育委員会。

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

１．調査に至る経緯

宮川村では、民俗資料を収蔵・展示する郷土文化伝習館を中心として、「歴史ふれあいの里」整備計画が策定された。この整備事業に伴い、平成４年、塩屋金清神社遺跡の緊急発掘調査が実施された。この調査によって、未製品を含む塩屋石製の石製品が約1,000点出土した。また、加工具と考えられる敲石が多数出土し、石棒を中心とした石製品の製作址という性格をもつ遺跡であることが改めて確認された。緊急調査が実施された地点では、谷を埋める土層中から多量の遺物が出土したが、住居址や土坑などの遺構は検出できなかった。

今後予想される各種開発に先駆け、遺跡範囲の把握と遺構の検出を目的として、今回の発掘調査を計画した。

今回設定した調査区は、字宮ノ上に所在し、『改訂版 岐阜県遺跡地図』には、宮ノ上遺跡で登録されている。緊急発掘調査を実施した字ほそおさとは、字堺を接している。出土遺物をはじめ地形からみても、緊急発掘調査区と今回の発掘調査区は、同一の遺跡と考えられる。このことから、今回の調査にあたって、塩屋金清神社遺跡の名称を使用した。なお、便宜上、字ほそおさの緊急発掘調査区をＡ地点、今回の調査区をＢ地点とした。

２．調査の経緯

本遺跡の調査は、平成５年度に現地調査を行ない、平成10年度に報告書作成を実施した。

＜平成５年度＞

平成５年５月19日、平成５年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書を提出。同９月27日同補助金交付決定通知書を受領。

同８月26日、塩屋金清神社遺跡Ｂ地点の現地調査を開始。同９月27日、現地調査を終了。

同12月20日、平成５年度岐阜県文化財保護費補助金交付申請書を提出。同24日、同補助金交付決定通知書を受領。

平成６年３月10日、平成５年度岐阜県文化財保護費補助金計画変更承認申請書を提出。同14日、同計画変更承認書を受領。同31日、実績報告書提出。

＜平成10年度＞

平成10年５月６日、平成10年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書を提出。同６月24日、同補助金交付決定通知書を受領。

同11月24日、平成10年度岐阜県文化財保護費補助金交付申請書を提出。同12月１日、同補助金交付決定通知書を受領。

第２図　遺跡周辺地形図およびグリッド配置図

第２節　調査の概要

１．調査団の編成

現地調査の調査団は、以下のとおり組織した。なお、役職名は平成５年度当時のものである。

調査団長	道下　則明	宮川村村長		
調査副団長	谷口　徹	宮川村教育委員会教育長		
調査指導	岐阜県教育委員会指導部文化課			
調査担当	小島　功	宮川村教育委員会主事		
作業員	秋山　妙子	荒戸　延久	井上　敏雄	大下規久臣
	大下　公久	小坂　喜男	坂口　恒雄	坂本アヤ子
	㈱清水正男	田下　ぜん	立田　サヨ	立田　隆資
	谷口　顯久	寺門　政雄	中谷　菊枝	西田ハル子
	畠中　裕子	増子　誠	三島美奈子	山口　勝美
	吉田　彦作			
整理作業員	上崎　恵子	佐藤美保子	佐藤　孝子	谷向香保子
事務局				
事務局長	森下　真次	宮川村教育委員会事務局長		
庶務	平田　治美	宮川村教育委員会主事		

２．調査の方法

グリッドは、平成４年度の調査区（Ａ地点）のグリッドを延長して設定した。調査対象地区の北端を起点にして、南北方向に数字、東西方向にアルファベットを付けた。今回の調査区は、南北方向18～29列、東西方向Ｍ～Ｓ列である。各グリッドは、それぞれの交点で呼称する。グリッドは、２ｍ四方をひとつの単位とした。

調査は、南北方向１本、東西方向２本のトレンチを設定し、これを掘り下げた。作業は、すべて人力によるものである。

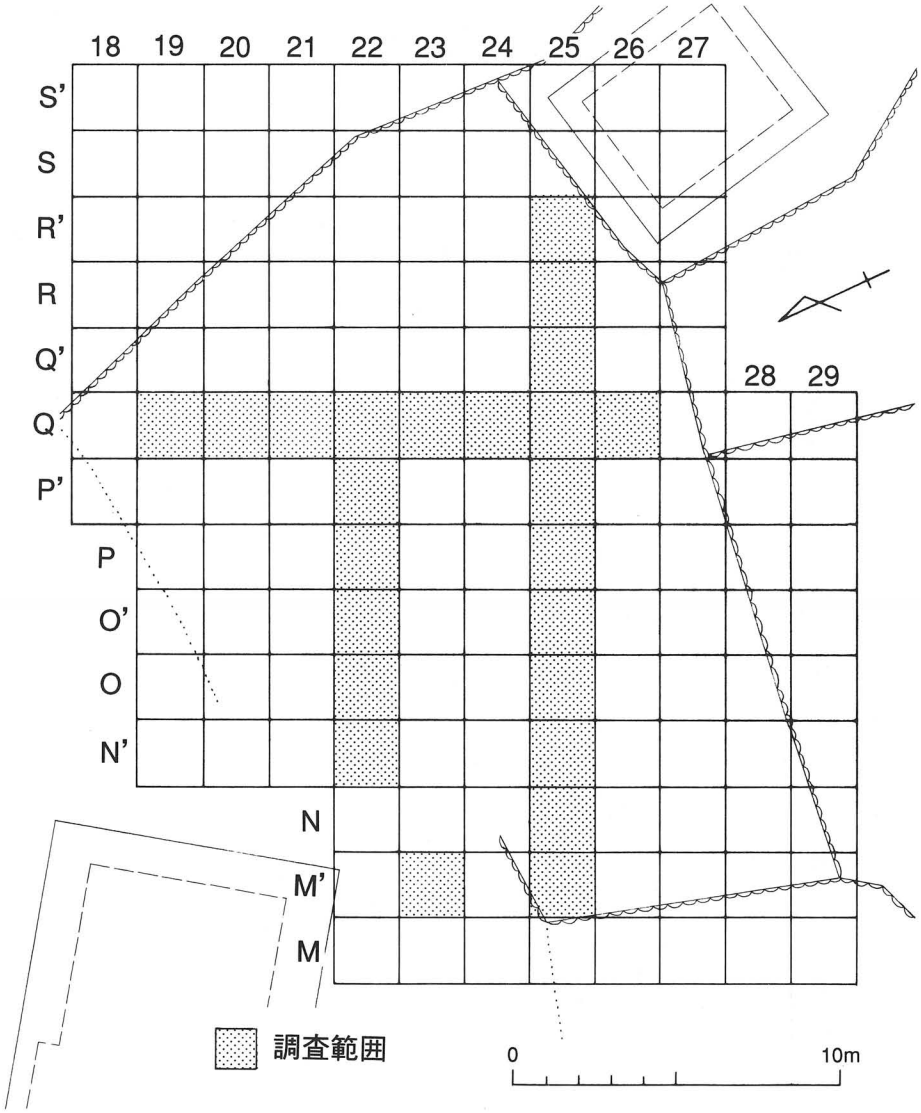
出土した遺物は、グリッドを単位として、作業日の層毎に、一括して取り上げた。

３．調査の経過

平成５年８月26日、発掘調査を開始する。

Q列と25列に、十文字にトレンチを設定し、Q列は19～26区、25列はM′～R区を掘り下げた。第Ⅰ層：表土層の下からは、中世の遺物包含層である第Ⅱ層：黒褐色土層が検出された。また、縄文時代の遺物包含層は、第Ⅲ層：黄褐色砂礫層から下位の層が相当することが判明した。９月下旬までには、本調査地点の基本層序が確定した。この後、調査範囲を22列へと進めた。

第Ⅲ層：黄褐色砂礫層中には、花崗岩の大型礫が多量に含まれることから、作業は難航した。９月６日、作業日数が限られてきたことから、セクション図を作成する25列を除いて、トレンチ調査から２ｍ四方のグリッドを掘り下げる調査に変更した。



第３図　調査区域図

ここまでの調査で、豊富に遺物が出土するとはいえないまでも、縄文時代後期から晩期の包含層が確認されたことで、この地点が遺跡の範囲内にあることが判明した。しかしながら、花崗岩の大型礫が多量に含まれ、急傾斜であるという地山面の検出状態から想定して、この地点から遺構が検出される可能性は低いものと判断した。

９月20日、25列のセクション図を作成した。９月21日、調査区の埋め戻し作業を開始した。埋め戻し作業が順調に進んだことから、掘り下げを一端断念した25列の第Ⅲ層から第Ⅴ層を掘り上げた後、このトレンチも埋め戻し、９月27日、発掘作業をすべて終了した。

第3章　層　　序

第1節　基本層序

1．はじめに

塩屋金清神社遺跡の所在する塩屋地区は、背後に軟弱な土質の山々が控え、土砂災害の危険地域に指定されている。近年、最も大きな被害をもたらした土石流災害は、大正3年に起こっている。規模の大小を問わず、先史時代においても、しばしば土石流の被害を受けたであろうことは想像に堅くない。

今回の調査では、主に22・25列トレンチで、腐食土と砂礫層の互層が確認できた。このうち、砂礫層は、部分的に大型の礫を含んでおり、土石流によって形成された可能性があるが、断定はできない。

なお、25・22列トレンチでは、第2章第2節で述べたように、一旦断念した砂礫層の再調査を実施した。第4図に示したセクションは、この再調査を実施する前に作成したものである。

2．基本層序

＜第Ⅰ層：表土層＞

もとの畑地および水田の耕作土と、これらを覆う表土層である。土層の断面から整地の状況が観察され、次のａ～ｆに細分できる。

第Ⅰａ層：現況の表土層
第Ⅰｂ層：旧畑地耕作土
第Ⅰｃ層：旧水田耕作土（砂混じりの灰褐色土）
第Ⅰｄ層：旧水田盛土（砂混じりの暗褐色土）
第Ⅰｅ層：旧水田盛土（砂混じりの暗褐色土）
第Ⅰｆ層：旧水田盛土（砂混じりの褐色土）

第Ⅰａ層は、現況の表土層である。第Ⅰｂ層は、旧畑地の耕作土とみられる。第Ⅰｃ層は、砂混じりの灰褐色土で、下部に鉄分の沈殿がみられ、旧水田の耕作土と考えられる。第Ⅰｄ～ｆ層は、砂混じりの暗褐色または褐色を呈する土層で、旧水田を整地する際の盛土と考えられる。

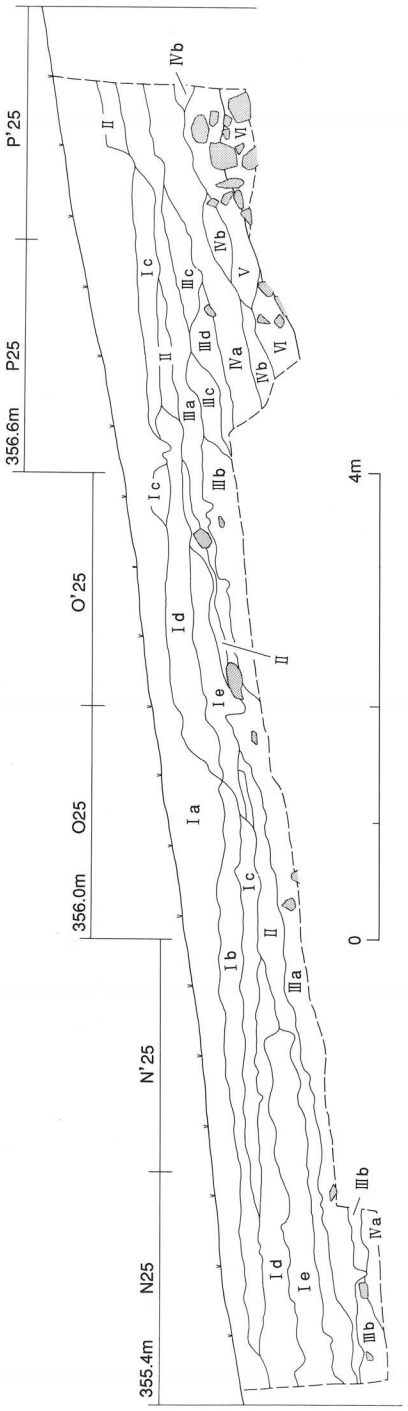
＜第Ⅱ層：黒褐色土層＞

水田開墾以前の土層とみられる。カーボンを微量に含む。

＜第Ⅲ層：黄褐色砂礫層＞

主に花崗岩類の劣化したものが、二次的に堆積した砂礫層である。砂粒は細かく、シルティーサンドに近いものである。色調は、黄褐色または茶褐色を呈し、カーボンの粒子を含んでいる。調査区の西では、小型の礫を少量含んでいるにすぎないが、調査区の東では、1ｍ程度の花崗岩類の大型角礫を含んでいる。

色調の違いから、第Ⅲａ層：暗茶褐色砂礫層、第Ⅲｂ層：明黄褐色砂礫層、第Ⅲｃ層：黄褐色



第3図　セクション図

砂礫層、第Ⅲｄ層：暗黄褐色砂礫層に細分できる。

＜第Ⅳ層：暗褐色土層＞

暗褐色を呈する土層で、砂が混入している。砂の混入が少ない第Ⅳａ層と、砂の混入が多い第Ⅳｂ層とに分かれる。

＜第Ⅴ層：黄褐色砂礫層＞

主に花崗岩類の劣化したものが、二次的に堆積した砂礫層である。10～30cm程度の礫が混入している。第Ⅲ層と同様に砂粒が細かい。

＜第Ⅴ′層：黒色土層＞

黒みの強い黒色土層。部分的に認められたにすぎない。

＜第Ⅵ層：黄褐色砂礫層＞

30cmを超す花崗岩類の角礫が多く含まれる砂礫層。第Ⅲ層・第Ⅴ層の砂礫層と比較して、砂粒が粗く、ある程度の淘汰を受けているとみられる。約50cmを掘り下げたが、遺物の包含は認められず、基盤層と想定した。ただし、調査が不可能であったため、この下位の状況を確認するには至らなかった。

第２節　各層の分布と時期

第１節で述べた各層の分布状態と時期は、以下のとおりである。

＜第Ⅰ層：表土層＞

第４図のセクションに示すように、現況の地表面は、ほぼ東から西へと向けて傾斜している。Ⅰａ・ｂ層は、畑地の耕作土であるが、色調や土質の違いから分層が可能である。畑地以前には水田があったと確認された。Ⅰｃ層が水田耕作土にあたり、Ⅰｄ～ｆ層が整地する際の盛土と考えられる。水田跡は、部分的に削られているが、比較的おさの短い水田であったと推定される。このことは、Ａ地点の“ほそおさ”という字の由来を示唆しているようで、興味深い。

＜第Ⅱ層：黒褐色土層＞

水田の開墾によって掘削され、部分的に残る。東西方向に傾斜して堆積している。わずかながら、中世の陶器類が出土している。第Ⅰ層：表土層でみられた近世以降の陶磁器類は出土しておらず、中世の遺物包含層であると考えられる。

＜第Ⅲ層：黄褐色砂礫層＞

Q列および22・25列のいずれのトレンチでも確認ができた。ただし、Q列トレンチでは、大型の礫が多く含まれ、完掘には至っていない。22・25列トレンチでは、礫の混入が少なく、土器や石器類などが出土している。出土土器の年代から、縄文晩期中葉から後葉にかけての遺物包含層と考えられる。調査区の山寄り（北東）では、大型礫を含み、土石流によって形成された可能性を示している。しかしながら、22・25列トレンチの出土遺物には、強くローリングを受けたものはみられず、生活面ともとれる遺物の出土状態がみられた。

＜第Ⅳ層：暗褐色土層＞

22・25列トレンチで、傾斜して堆積している状況が確認できた。Q列トレンチでは、上位の第Ⅲ層に大型礫を含むことから、部分的な確認をしたにすぎない。土器や石器類のほか、塩屋石製の未製品を含む石製品が出土している。出土土器の年代から、縄文後期から晩期前葉にかけての包含層と考えられる。

＜第Ⅴ層：黄褐色砂礫層＞

分布状況の確認は、第Ⅳ層と同様である。出土遺物は、ごく少量であり、第Ⅳ層のものと明瞭な時期差が認められなかった。Q列トレンチの状況は確認できなかったが、第Ⅲ層と同様に土石流によって形成された可能性もある。

＜第Ⅴ′層：黒色土層＞

25列トレンチの西端部と東端部において検出された。ごく部分的な検出であったため、遺物の出土はみられなかったが、遺物包含層の可能性もある。

＜第Ⅵ層：黄褐色砂礫層＞

22・25列トレンチにおいて確認した。遺物の出土はみられず、淘汰を受けたとみられる粗い砂粒や礫のローリング状態などから水流があったものとし、基盤層と推定した。

第4章　人　工　遺　物

第1節　縄文土器

今回の調査によって出土した縄文土器は、後期後葉から晩期後葉にかけてのものである。いずれも断片的な資料にすぎないが、次の4期に区分される。

Ⅰ期：縄文後期後葉、Ⅱ期：縄文晩期前葉、Ⅲ期：縄文晩期中葉、Ⅳ期：縄文晩期後葉

分類にあたっては、深鉢を中心に1群1型式としたが、資料内容が乏しいため、その他の器種も一括して扱った。また、時期決定のできない粗製土器は、まとめて扱った。

調査面積が狭く、絶対量が少ないことから、概要を完全に把握できていない可能性があるが、B地点の土器は、A地点に比較して新しい時期のものが主体となっている。今回出土した縄文土器のうち、晩期後葉に属すものが最も多い。

層毎にみると、第Ⅲ層では、Ⅲ期：縄文晩期中葉からⅣ期：縄文晩期後葉、第Ⅳ・Ⅴ層では、Ⅰ期：縄文後期後葉からⅡ期：縄文晩期前葉までの土器がそれぞれ出土している。

1．Ⅰ期：縄文後期後葉に属す土器群

第1群土器（第5図1～4）　井口Ⅱ式に比定または相当するとみられる土器群である。

a類（同1）口縁部が平縁となる深鉢である。太い沈線が水平方向に施されている。

b類（同2）口縁部がやや外反し、緩やかな波状口縁をもつ深鉢である。

c類（同3）口縁部がやや外反し、平縁となる深鉢である。口縁部に平行沈線をめぐらす。

d類（同4）口縁部に平行沈線をめぐらす浅鉢である。

第2群土器（第5図5・6）　八日市新保式に相当するとみられる土器群である。

a類（同5）極めて断片的な資料であるが、八日市新保式に相当する深鉢とみられる。

b類（同6）八日市新保式または、前後の型式に伴うとみられる注口土器である。

2．Ⅱ期：縄文晩期前葉に属す土器群

第1群土器（第5図7・8）　御経塚式に相当するとみられる土器群である。

a類（同7・8）沈線で区画し、縄文が施される深鉢である。

3．Ⅲ期：縄文晩期中葉に属す土器群

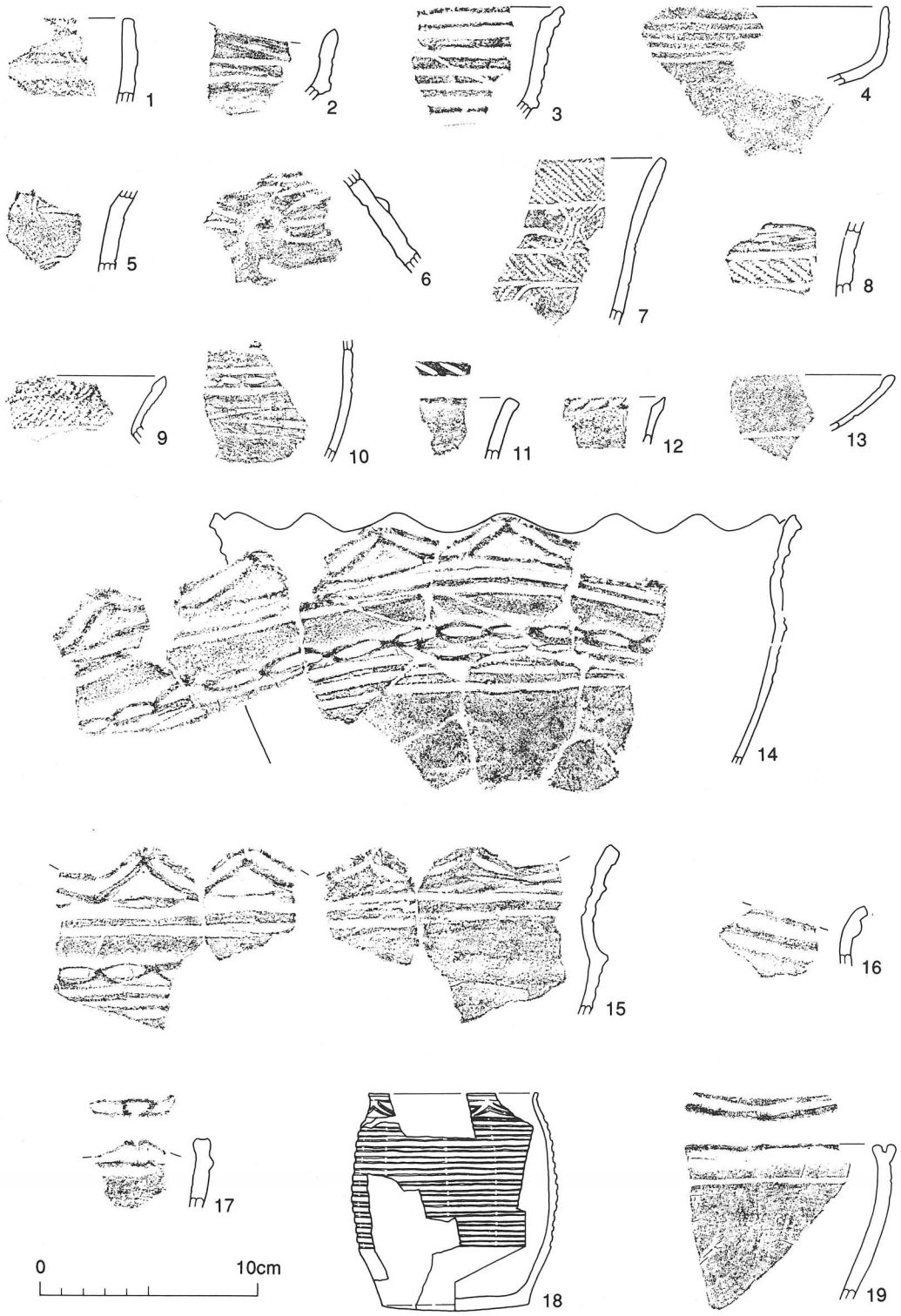
第1群土器（第5図9～13）　中屋式に比定または相当するとみられる土器群である。

a類（同9）中屋式に比定される深鉢である。「く」の字に外反する口縁部をもつ。口縁部に縄文が施され、頚部には沈線が施される。

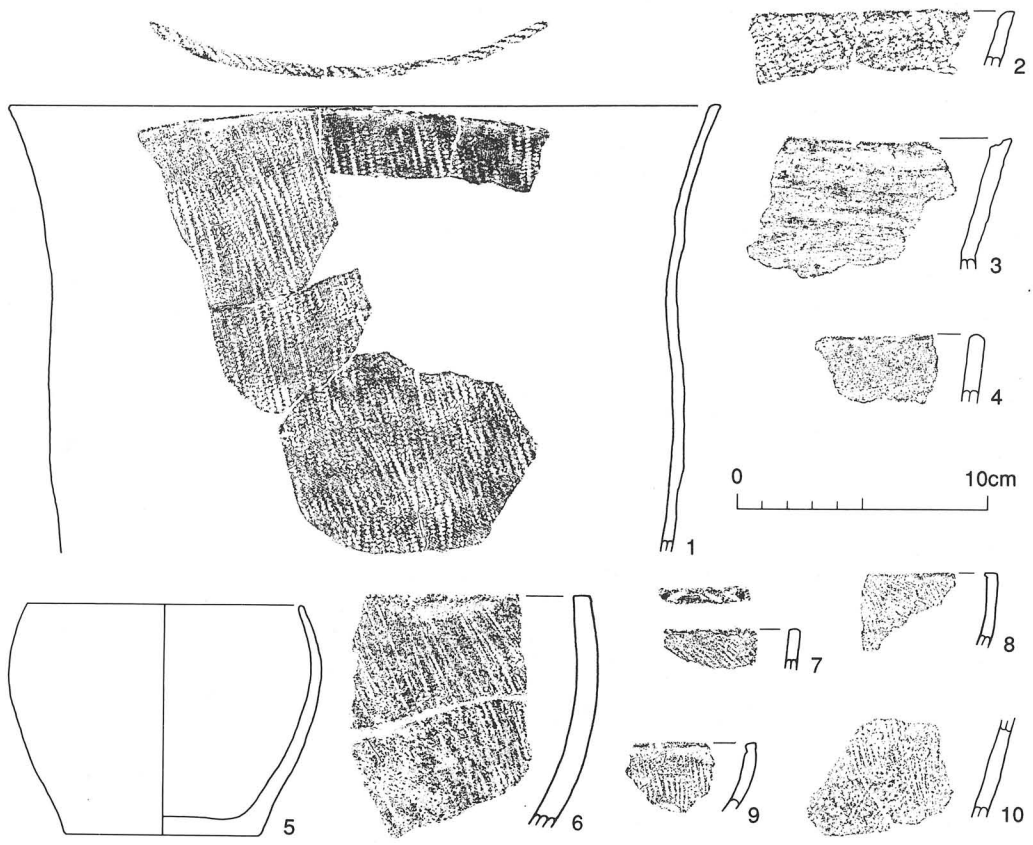
b類（同10）中屋式に比定される深鉢である。胴部に沈線が施され、その間には列点が施される。

c類（同11・12）粗製の鉢または深鉢である。口縁部に刻みをもつ。小破片であるが、御経塚式ないし中屋式に相当するとみられる。

d類（同13）器面がよく研かれた浅鉢である。口縁部と平行な沈線を施す。御経塚式または中



第５図　縄文土器拓影および実測図１



第６図　縄文土器拓影および実測図２

屋式に伴う浅鉢と考えられる。

４．Ⅳ期：縄文晩期後葉に属す土器群

第Ⅰ群土器（第２図14～19）下野式に比定されるか、あるいは大洞Ａ式に並行する土器群である。

ａ類（同14・15）下野式に比定される深鉢である。胴部に楕円形の隆帯を連続して施し、口縁には、16単位となる三角形の波頂部をもつ。同14・15は、接合しないが同一の個体で、同15は、内面の施文を示すために載せた。

ｂ類（同16）波状口縁をもつ深鉢または、鉢である。

ｃ類（同17）山形の小波状口縁をもつ鉢である。波頂部には、隆帯によって楕円形の施文がなされている。

ｄ類（同18）胴部に沈線をめぐらせる小型精製鉢である。赤色顔料の塗られた痕跡が残る。

ｅ類（同19）第Ⅰ群土器に伴うものとみられる鉢である。口縁部には、一条の深い沈線がめぐる。頚部は、沈線によって施文される。

５．粗製土器

縄文（第６図１・２）、無文（同３～５）、条痕文（同６～10）がみられる。

このうち、縄文は、器形などから後期に属す深鉢と考えられるが、Ⅰ期：縄文後期後葉の土器群には伴わないものと考えられる。無文および条痕文は、Ⅱ期：縄文晩期前葉以降のものと考えられる。これらのうち、無文の粗製小型鉢（同５）は、Ⅳ期：縄文晩期後葉の第Ⅰ群土器に伴う可能性が高い。

第2節　石　　器

今回の調査によって出土した石器は、総数75点である。器種の構成は、第1表に示した。

層毎では、中世以降の堆積層（第Ⅰ・Ⅱ層）から26点、縄文晩期中葉から後葉にかけての遺物包含層（第Ⅲ層）から23点、縄文後期後葉から晩期前葉にかけての遺物包含層（第Ⅳ・Ⅴ層）から18点が出土している。石器の組成率は、調査面積が狭く、出土した石器の点数も少ないことから、部分的な様相を示しているに過ぎないが、第Ⅳ・Ⅴ層では、敲石が約3割を占めている。このことは、後述する塩屋石製石棒の出土を含め、石棒製作が行なわれた可能性を示している。

第1表　石器組成表

器種＼層位	第Ⅰ･Ⅱ層	第Ⅲ層	第Ⅳ･Ⅴ層	合　計
打製石斧	12	5	3	20（26.67%）
横刃形石器	3	1	2	6（8.00%）
磨石	7	5	2	14（18.67%）
凹石	3	2	2	7（9.33%）
台石	1	4	1	6（8.00%）
有縁石皿	1	1	－	2（2.67%）
敲石	2	－	6	8（10.67%）
スクレイパー	4	2	－	6（8.00%）
楔形石器	1	2	2	5（6.67%）
赤色顔料付着剥片	－	1	－	1（1.33%）
合　計	34	23	18	75（100.01%）

1．打製石斧（第7図1～5：第2表）

総数20点が出土したが、完形品は6点にすぎない。打製石斧の形態分類について、次の分類基準に従った(1)。

＜撥形A類＞刃部巾が基部巾の1.5倍以上で、最大長が最大巾の2倍未満のもの。

＜撥形B類＞刃部巾が基部巾の1.5倍以上で、最大長が最大巾の2倍以上のもの。

＜短冊形A類＞刃部巾が基部巾の1.5倍未満で、最大長が最大巾の2倍未満のもの。

＜短冊形B類＞刃部巾が基部巾の1.5倍未満で、最大長が最大巾の2倍以上のもの。

＜分銅形＞中央部の両側縁に大きな抉りが存在し、抉りの両側がほぼ均等になるもの。

完形品6点のうち、短冊形A類2点（第7図1）、短冊形B類4点（同2・4・5）であった。

石材は、濃飛流紋岩・安山岩・凝灰岩・砂岩・塩屋石などが使用されている。

2．横刃形石器（第7図6～9：第3表）

総数6点が出土した。石材は、頁岩・凝灰岩質流紋岩・塩屋石が使用されている。

3．磨石（第8図1～5：第4表）

総数14点が出土した。手ごろな川原石を利用したもので、濃飛流紋岩・多孔質安山岩・砂岩な

どがみられる。礫の選択傾向は、宮川村内の他の遺跡のそれと同様である。

4．凹石（第8図6～8：第5表）

総数7点が出土した。使用石材は、磨石と同様であるが、塩屋石の柱状節理を利用したものが2点（第8図7・8）みられる。

5．台石（第9図1～4：第6表）

総数6点が出土した。板状節理または方角状節理を呈する塩屋石を利用したものが2点（第9図1・4）みられ、扁平な川原石を利用したもの（同2）、円形の礫を利用したもの（同3）がみられる。第Ⅲ層から出土したものには、赤色顔料の付着したもの（同1）が1点みられる。

6．有縁石皿（第9図5・6：第7表）

総数2点が出土した。1点は、多孔質安山岩製のもの（第9図5）で、表面採集品である。もう1点は、第Ⅲ層から出土したもので、板状節理を呈する塩屋石を利用している（同6）。

7．敲石（第10図1～5：第8表）

総数8点が出土した。このうち、6点が第Ⅳ層から出土している。塩屋金清神社遺跡の敲石を、次のa～dの4類に分類する。

＜a類＞自然礫の端部をそのまま使用したもの。

＜b類＞二次的な加工の認められるもののうち、自然礫の端部に鈍角の単一剥離面を設けたもので、剥離面の稜線を使用するもの。

＜c類＞二次的な加工の認められるもののうち、自然礫あるいは厚手の剥片に複数の剥離によって刃部を作り出したもの。いわゆる礫器・礫器様石器にあたる。

＜d類＞厚手の剥片の稜線を使用するもの。または、剥片に二次的な調整を加え、楕円形または円形に成形したもの。横刃形石器に類似するが、敲打痕が認められる。

今回の調査では、a類2点（第10図1）、b類2点（同2）、c類1点（同3）、d類3点（同4・5）が出土した。これらは、日常的な敲石の用途に加え、塩屋石製石製品の製作に用いられたと考えられる。主に、a類が剥離段階、b～d類が敲打段階に用いられたものと想定される。

8．スクレイパー（第11図1～3：第9表）

総数6点が出土した。スクレイパーを次の3類に分類する。

＜Ⅰ類＞押圧剥離による刃部調整を行なったもの。狭義のスクレイパーにあたる。

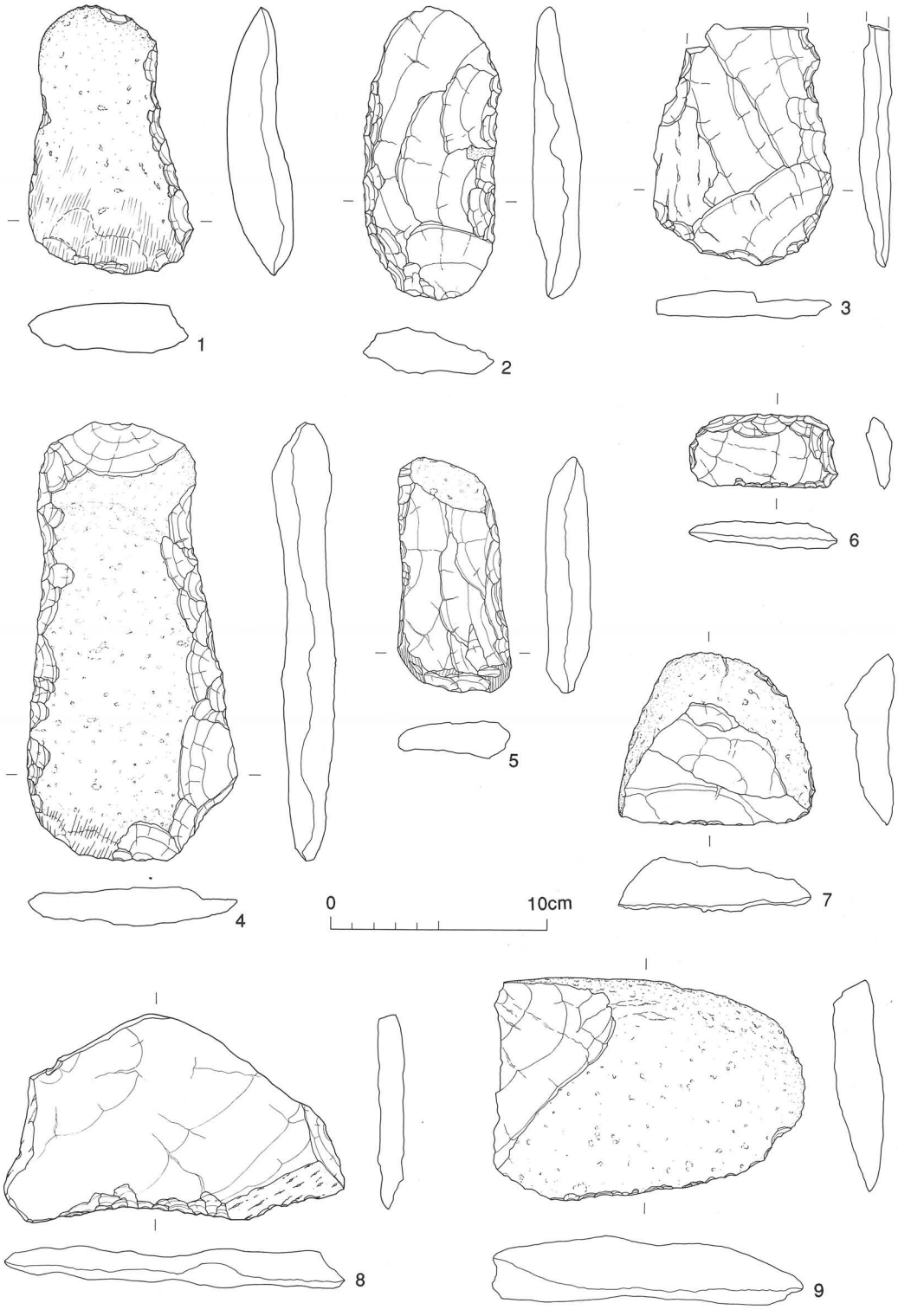
＜Ⅱ類＞直接打撃によって粗い刃部を形成するもの。二次加工剥片または石核の可能性をもつものを含んでいる。

＜Ⅲ類＞使用痕あるいは細部調整による刃部をもつもの。使用痕剥片・細部調整剥片にあたる。

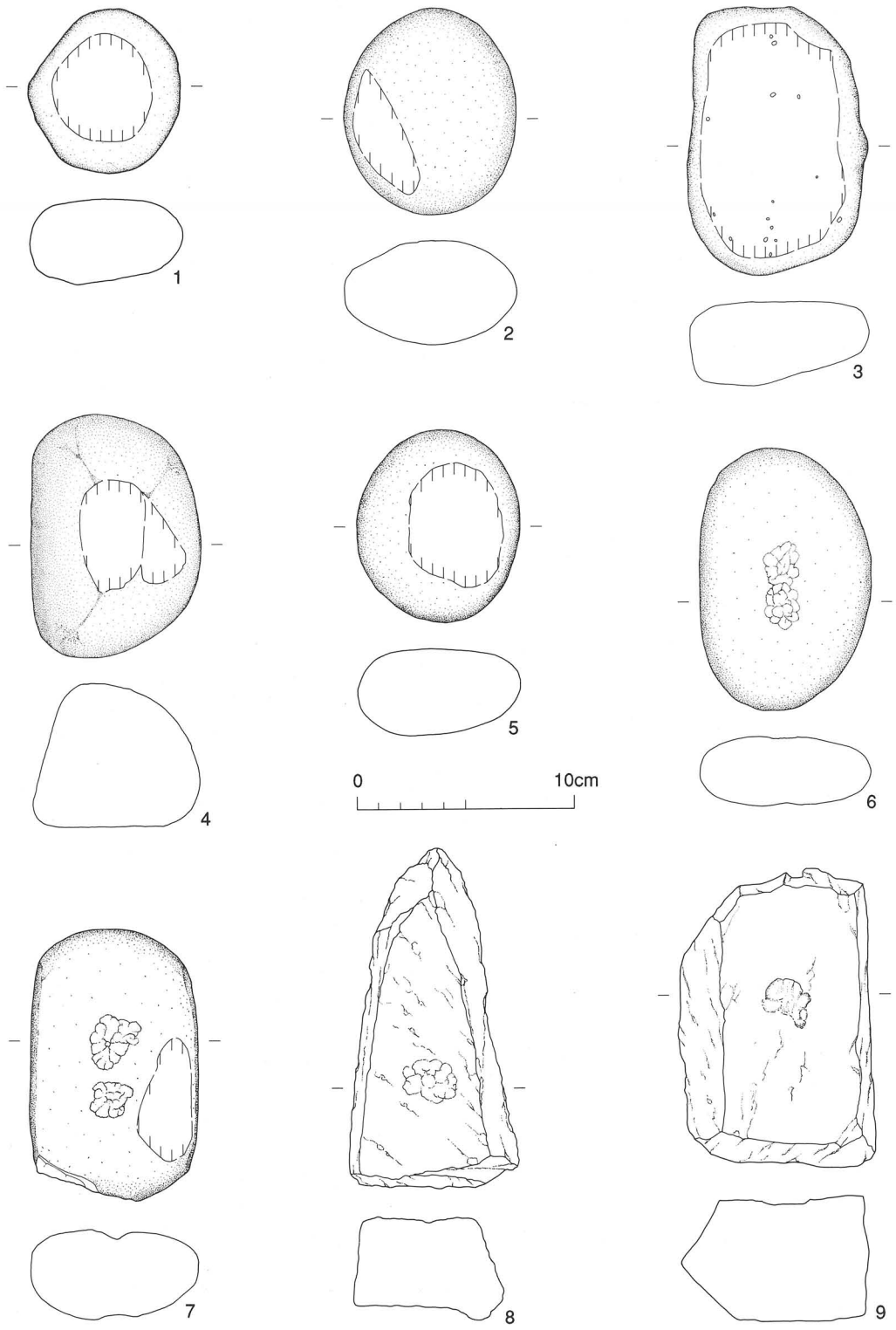
今回の調査では、Ⅰ類2点（第11図1・2）、Ⅱ類1点（同3）、Ⅲ類3点（同4・5）が出土した。石材別では、在地供給が可能なチャートが4点みられるほか、搬入石材の下呂石・輝石安山岩各1点が使用されている。

9．楔形石器（第11図6～8：第10表）

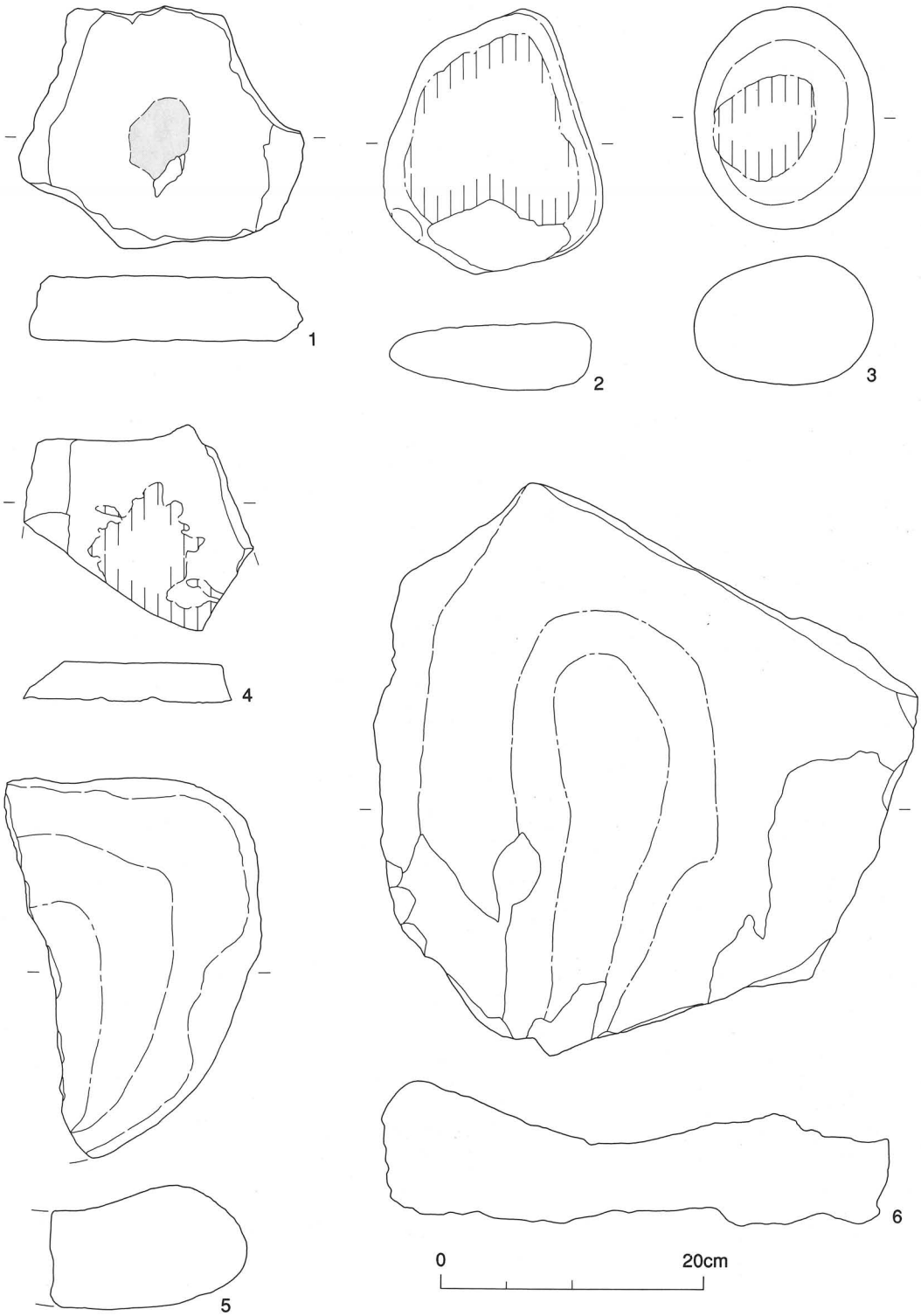
総数5点が出土した。流紋岩3点、チャート1点、下呂石1点が使用されている。このうち、流紋



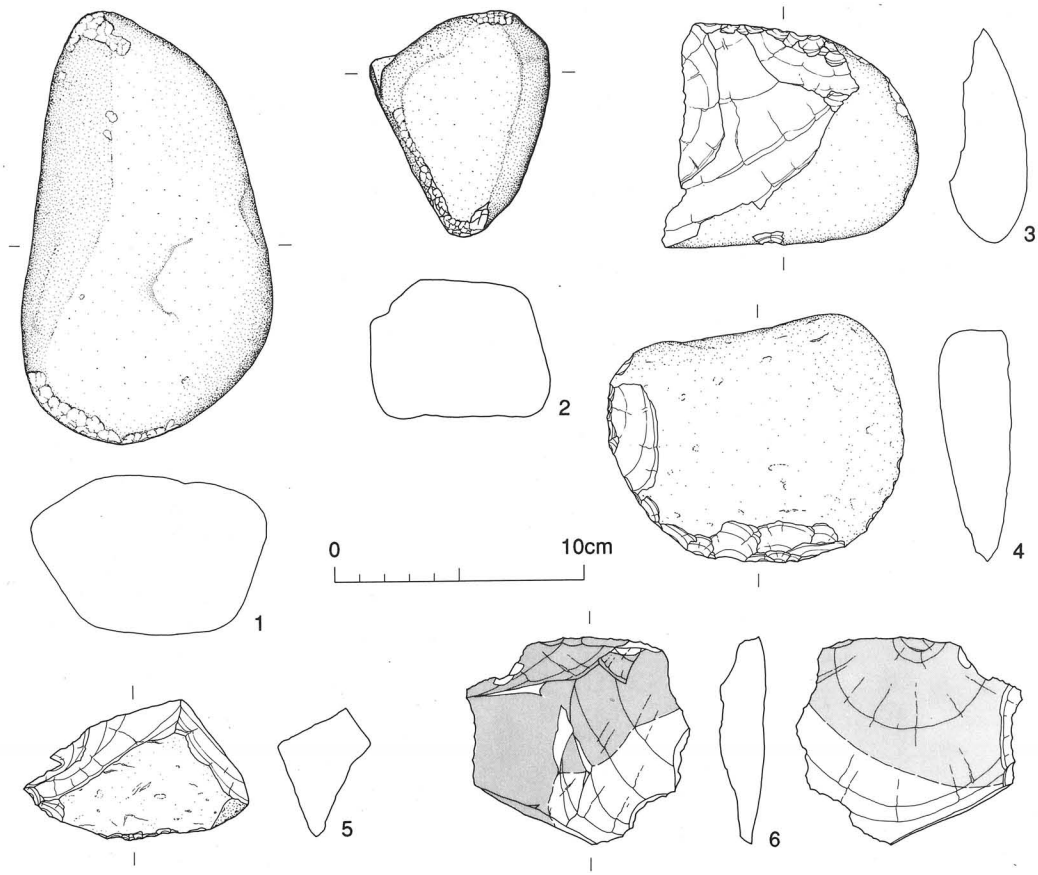
第７図　打製石斧（１～５）・横刃形石器（６～９）実測図



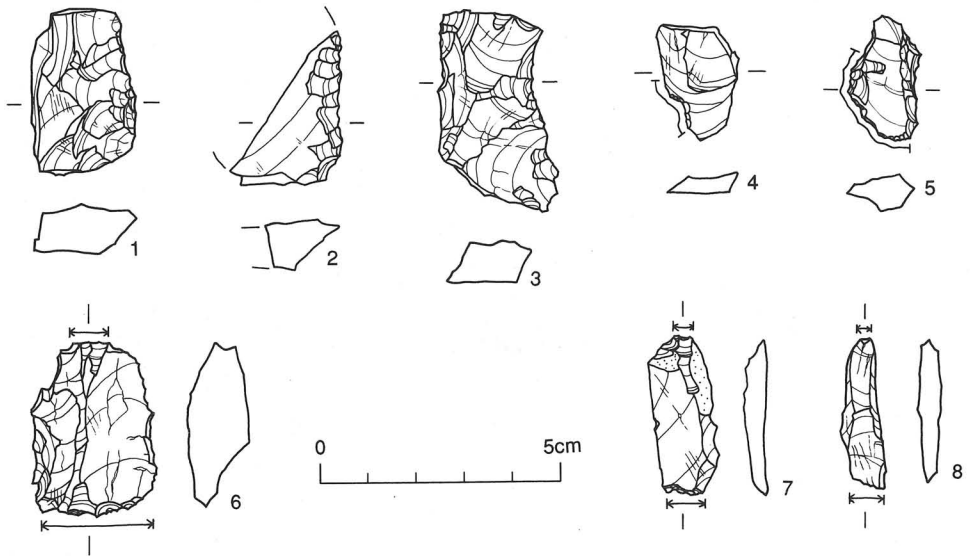
第8図　磨石（1～5）・凹石（6～9）実測図



第９図　台石（１～４）・有縁石皿（５・６）実測図



第10図　敲石（1～5）・赤色顔料付着剥片（6）実測図



第11図　スクレイパー（1～5）・楔形石器（6～8）実測図

岩製のものは、塩屋谷に産出するガラス質流紋岩である。下呂石に類似するが、節理が多いことから剥片石器素材としては劣り、楔形石器にのみ使用例が認められる。

10. 赤色顔料付着剥片（第10図６：第11表）

第Ⅲ層から、赤色顔料の付着した塩屋石製の剥片が出土している。石器としての二次加工はみられないが、赤色顔料が表裏に$\frac{1}{2}$程度付着している。

同層からは、赤色顔料の付着した台石が出土しており、これと関係する道具と考えられることから石器として扱った。

註(1)　林 直樹ほか、1995：「宮川下流域の打製石斧」『会報 斐太』、４．

第2表　打製石斧計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	形態分類	遺存状態	石質	長さ	基部巾	刃部巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	M′23	Ⅲ層	—	基部欠損	安山岩	(6.6)	—	9.0	(1.9)	(139)	
2	N25	Ⅳ層	—	胴部破片	砂岩	(4.3)	—	—	(1.7)	(60)	
3	N′22	Ⅱ層	—	刃部破片	飛騨片麻岩	(8.2)	—	—	(1.8)	(93)	
4	N′25	Ⅲ層	—	基部欠損	安山岩	(16.5)	—	9.6	3.3	(718)	
5	O22	Ⅱ層	短冊A	完形	閃緑岩	12.4	5.5	7.7	2.2	295	第7図1
6	O22	Ⅲ層	短冊B	完形	濃飛流紋岩	20.2	7.2	9.7	2.5	622	同4
7	O′22	Ⅱ層	—	基部欠損	濃飛流紋岩	(10.4)	—	7.7	(3.2)	(347)	
8	O′22	Ⅲ層	—	基部・胴部欠損	砂岩	(7.6)	—	8.5	(2.6)	(223)	
9	O′25	Ⅲ層	—	基部欠損	濃飛流紋岩	(10.2)	—	8.8	(4.1)	(408)	
10	O′25	Ⅳ層	—	刃部欠損	塩屋石	(10.1)	5.0	—	(2.0)	(172)	
11	P25	Ⅴ層	—	刃部破片	砂岩	(8.8)	—	—	(2.0)	(174)	
12	Q19	Ⅰ層	—	刃部・胴部欠損	塩屋石	(10.3)	9.1	—	(1.5)	(135)	
13	Q21	Ⅰ層	短冊B	完形	凝灰質流紋岩	13.5	5.9	6.0	1.9	176	同2
14	Q21	Ⅰ層	短冊B	完形	凝灰岩	11.0	4.4	5.4	1.9	142	同5
15	Q22	Ⅰ層	—	基部欠損	塩屋石	(11.1)	—	8.3	(1.1)	(105)	同3
16	Q22	Ⅰ層	短冊A	完形	凝灰岩	13.0	5.2	6.7	3.2	274	
17	Q25	Ⅰ層	—	刃部・胴部欠損	頁岩	(5.5)	4.2	—	1.5	(38)	
18	表面採集	—	—	胴部破片	濃飛流紋岩	(4.2)	—	—	1.6	(79)	
19	表面採集	—	—	基部欠損	凝灰岩	(12.0)	—	9.5	(3.2)	(370)	
20	表面採集	—	短冊B	完形	安山岩	18.4	6.1	8.6	4.7	748	

第3表　横刃形石器計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	遺存状態	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	N25	Ⅱ層	1/3欠損	塩屋石	(12.5)	(13.4)	(2.8)	(405)	
2	N25	Ⅲ層	完形	凝灰質流紋岩	3.5	6.8	1.2	27	第7図6
3	O22	Ⅰ層	1/2欠損	頁岩	(5.4)	(6.1)	(1.2)	(32)	
4	P25	Ⅴ層	完形	頁岩	8.0	8.9	2.4	175	同7
5	P25	Ⅴ層	完形	凝灰質流紋岩	10.2	14.3	2.6	430	同9
6	Q20	Ⅰ層	完形	塩屋石	9.8	15.8	1.3	210	同8

第4表　磨石計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	遺存状態	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	M′23	Ⅰ層	完形	砂岩	8.7	7.6	4.0	377	第8図
2	M′23	Ⅲ層	1/3欠損	濃飛流紋岩	(12.1)	(10.9)	5.9	(1380)	
3	M′25	Ⅲ層	完形	飛騨片麻岩	12.2	8.0	3.8	649	同3
4	N25	Ⅳ層	完形	濃飛流紋岩	9.8	6.8	6.0	454	
5	N′22	Ⅱ層	完形	多孔質安山岩	8.7	7.6	6.0	546	
6	O25	Ⅳ層	完形	濃飛流紋岩	10.8	9.7	6.1	879	
7	O′25	Ⅲ層	完形	多孔質安山岩	9.8	7.9	4.0	400	
8	O′25	Ⅲ層	1/2欠損	安山岩	(5.7)	(5.9)	(4.6)	(182)	
9	P25	Ⅰ層	破片	砂岩	(3.7)	(4.8)	(4.3)	(102)	
10	P′22	Ⅰ層	完形	多孔質安山岩	7.6	7.0	3.9	299	同1
11	Q19	Ⅰ層	完形	砂岩	9.5	7.9	4.8	500	同2
12	Q19	Ⅲ層	完形	濃飛流紋岩	9.2	5.3	3.4	234	
13	Q26	Ⅰ層	完形	多孔質安山岩	10.1	8.6	3.5	388	
14	表面採集	—	完形	凝灰質流紋岩	11.1	7.8	6.6	774	同4

第5表　凹石計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	遺存状態	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	N25	Ⅱ層	完形	砂岩	11.9	7.8	3.1	466	第8図6
2	N′25	Ⅲ層	一部欠損	安山岩	(12.3)	7.7	4.1	(657)	同7
3	N′25	Ⅳ層	完形	塩屋石	13.7	8.6	5.5	931	同9
4	O′25	Ⅲ層	一部欠損	砂岩	11.0	8.9	(4.7)	(642)	同8
5	O′25	Ⅳ層	一部欠損	濃飛流紋岩	(11.5)	11.8	4.9	(928)	
6	Q26	Ⅱ層	完形	多孔質安山岩	9.6	7.7	4.7	524	
7	表面採集	－	完形	塩屋石	15.5	7.7	4.6	612	

第6表　台石計測値一覧表（単位cm・kg、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	遺存状態	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	N′22	Ⅲ層	½欠損	花崗閃緑岩	(30.0)	(18.7)	(9.0)	(6.90)	
2	N′25	Ⅲ層	完形	濃飛流紋岩	20.4	16.5	5.2	2.44	第9図2
3	N′25	Ⅲ層	完形	塩屋石	18.6	21.5	5.0	2.70	同1
4	O′25	Ⅴ層	完形	多孔質安山岩	22.0	13.4	9.9	3.30	同3
5	P25	Ⅰ層	破片	飛騨片麻岩	(17.9)	(9.2)	(3.0)	(0.70)	
6	Q26	Ⅲ層	½欠損	塩屋石	(15.7)	(17.4)	(3.0)	(1.04)	同4

第7表　有縁石皿計測値一覧表（単位cm・kg、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	遺存状態	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	N25	Ⅲ層	完形	塩屋石	43.7	41.0	11.5	18.75	第9図6
2	表面採集	－	½欠損	多孔質安山岩	(28.4)	(18.7)	(9.4)	(6.34)	同5

第8表　敲石計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	形態分類	遺存状態	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	N25	Ⅳ層	a	完形	濃飛流紋岩	17.6	10.2	6.5	1420	第10図1
2	N25	Ⅳ層	b	完形	輝緑凝灰岩	9.2	7.2	5.4	542	同2
3	N25	Ⅳ層	d	½欠損	ハンレイ岩	(7.5)	(6.7)	(3.2)	(273)	
4	O22	Ⅳ層	a	完形	輝緑凝灰岩	11.8	14.2	4.2	652	
5	O25	Ⅳ層	c	完形	凝灰岩	9.0	10.2	3.2	347	同3
6	O25	Ⅳ層	d	完形	安山岩	6.6	8.9	3.5	139	同5
7	Q22	Ⅰ層	b	完形	濃飛流紋岩	11.2	12.9	6.2	556	
8	Q26	Ⅱ層	d	完形	頁岩	9.5	11.6	2.9	433	同4

第9表　スクレイパー計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	形態分類	遺存状態	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	M′23	Ⅰ層	Ⅲ	完形	チャート	2.5	1.4	0.6	2.5	第11図5
2	N25	Ⅰ層	Ⅰ	完形	輝石安山岩	3.4	2.2	0.9	8.2	同1
3	O25	Ⅰ層	Ⅲ	完形	チャート	2.3	1.7	0.4	1.9	同4
4	O25	Ⅲ層	Ⅲ	刃部破片	チャート	(2.7)	(1.5)	(0.5)	(2.1)	
5	P25	Ⅲ層	Ⅰ	刃部破片	下呂石	(3.1)	(2.7)	(0.9)	(5.1)	同2
6	Q′25	Ⅰ層	Ⅱ	完形	チャート	4.2	3.5	1.0	11.2	同3

第10表　楔形石器計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	遺存状態	石　質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	N25	Ⅳ層	完　形	下呂石	3.1	0.8	0.4	1.2	第11図8
2	O22	Ⅰ層	一端欠損	塩屋流紋岩	(3.6)	1.9	0.7	(7.1)	
3	O25	Ⅳ層	完　形	塩屋流紋岩	3.2	1.2	0.5	2.2	同7
4	O′25	Ⅲ層	完　形	チャート	3.5	2.5	1.4	12.5	同6
5	O′25	Ⅲ層	一端欠損	塩屋流紋岩	(3.6)	(2.1)	0.4	(2.3)	

第11表　赤色顔料付着剥片計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	遺存状態	石　質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	N′25	Ⅲ層	完　形	塩屋石	8.3	8.8	2.1	129	第10図6

第3節　石　　製　　品

今回の調査によって、独鈷石１点、未製品を主体とする塩屋石製石棒18点、塩屋石柱状節理原石28点が出土した。このうち、塩屋石柱状節理原石としたものは、人工遺物と断定できないものであるが、遺跡内へ搬入された可能性をもっているため、この節で取り扱った。

層毎では、中世以降の堆積層（第Ⅰ・Ⅱ層）から24点、縄文晩期中葉から後葉にかけての遺物包含層（第Ⅲ層）から10点、縄文後期後葉から晩期前葉にかけての遺物包含層（第Ⅳ・Ⅴ層）から13点が出土している。このうち、第Ⅳ・Ⅴ層では、柱状節理原石５点、石棒７点が出土したのに対し、第Ⅲ層では、柱状節理原石８点、石棒２点が出土している。出土数が少ないことから、全体的な様相としてとらえることはできないものの、原石と石棒の割合は、石棒製作の衰退時期を示唆している可能性がある。

１．独鈷石（第12図９：第12表）

O22区第Ⅳ層から１点が出土した。淡緑色を呈する凝灰岩製で一部が欠損している。

２．塩屋石製石棒（第12図１～８：第13表）

総数18点が出土した。層毎では、第Ⅰ・Ⅱ層から９点、第Ⅲ層から２点、第Ⅳ・Ⅴ層から７点が出土している。完成品とみなされるものは１点で、17点が未製品である。遺存状態では、柱状節理原石の長さを残すと考えられるものが１点みられるのみで、ほかは、すべて欠損品と考えられる。遺存している長さも10cm前後のものが多く、20cmを超えるものは少ない。

石棒製作址としての性格から柱状節理原石の稜線・自然面の遺存程度を基準にⅠ～Ⅳ類、一般にいわれる磨製石器・石製品類の製作工程（剥離段階→敲打段階→研磨段階）を基準としてａ～ｄ類の各段階に区分した(1)。

＜第Ⅰ類＞原石の稜線・自然面が多く残り、原石の断面形の認識が容易なもの。

＜第Ⅱ類＞原石の稜線・自然面が消えつつあるが、原石の断面形の認識が可能なもの。

＜第Ⅲ類＞原石の稜線・自然面がほとんど消え、原石の断面形の認識が困難なもの。

＜第Ⅳ類＞原石の稜線・自然面が消え、完成品あるいは、完成とみなすに近い段階のもの。

＜ａ類＞剥離段階にあたるもの。剥離のみによる調整がなされているもの。

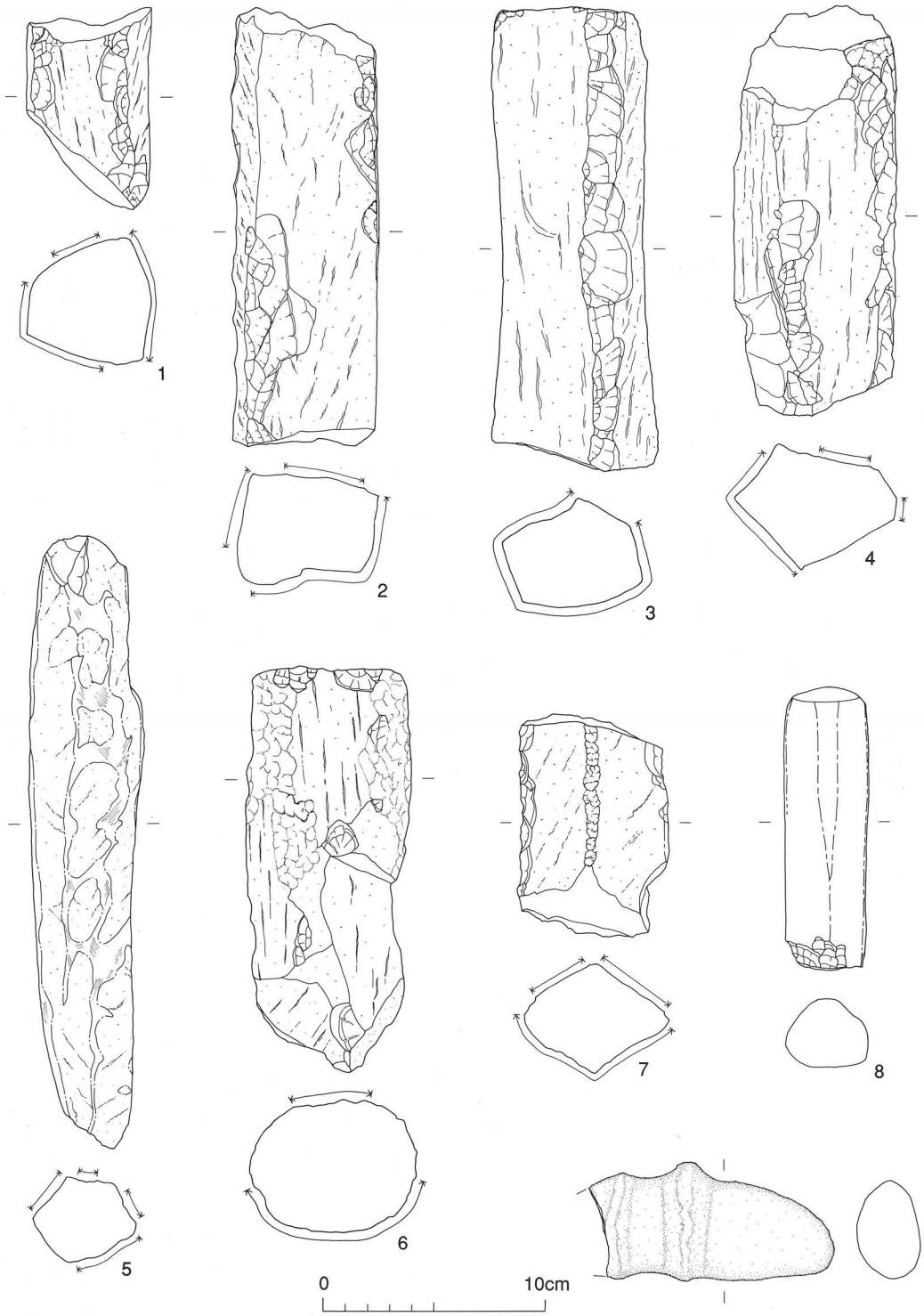
＜ｂ類＞敲打段階にあたるもの。剥離および敲打による調整、または敲打のみの調整がなされているもの。

＜ｃ類＞研磨段階にあたるもの。剥離および研磨、敲打および研磨、剥離と敲打および研磨による調整がなされているもの。

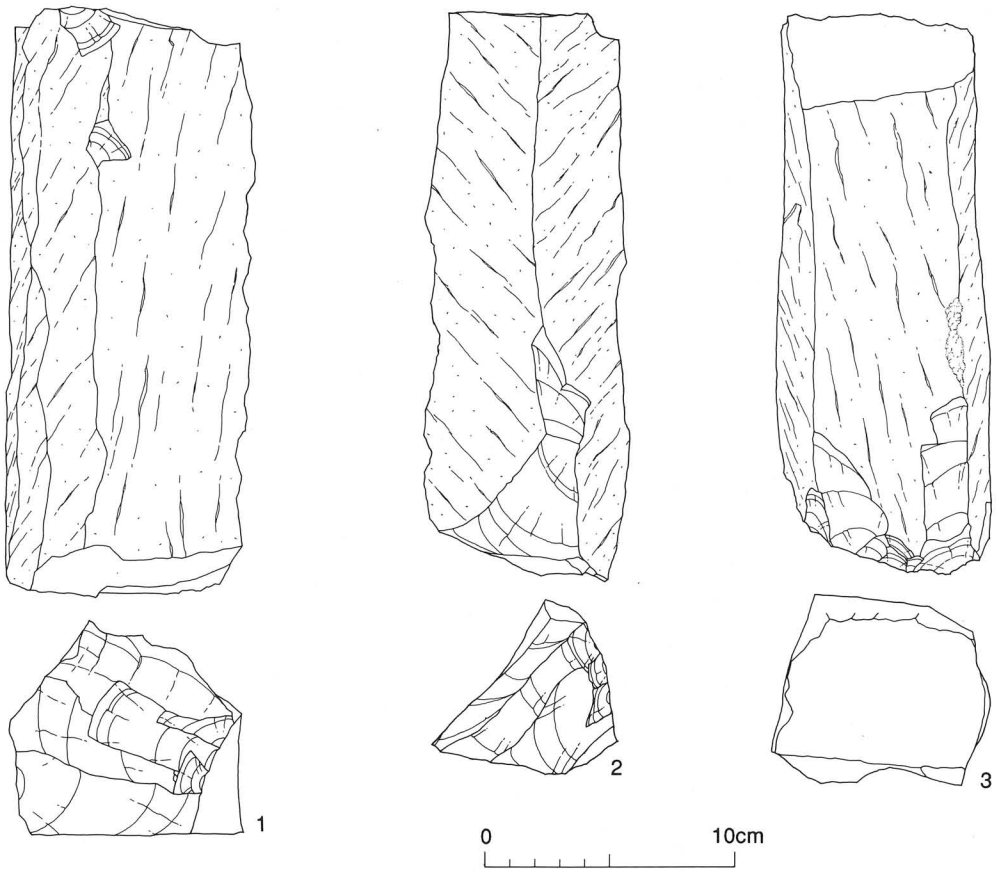
＜ｄ類＞研磨段階にあたるもののうち、原石の稜線を直接研磨するもの。

原石の稜線および自然面の遺存程度を基準にした分類では、第Ⅰ類15点（第12図１～５・７）、第Ⅱ類２点（同６）、第Ⅳ類１点（同８）となり、稜線や自然面の多く残すものが圧倒的に多い。

石製品類の製作工程を基準とした分類では、ａ類10点（同１～３）、ｂ類４点（同４・６）、ｃ類１点（同７）、ｄ類３点（同５・８）となり、剥離段階のものが最も多い。



第12図　塩屋石製石棒（1～8）・独鈷石（9）実測図〈断面の矢印は、自然面を示す。〉



第13図　塩屋石柱状節理原石実測図

Ⅰ～Ⅳ類とａ～ｄ類を総合した分類群では、Ⅰａ類10点（同１～３）、Ⅰｂ類２点（同４）、Ⅰｃ類１点（同７）、Ⅰｄ類２点（同５）、Ⅱｂ類２点（同６）、Ⅳｄ類１点（同８）となる。

Ⅰａ類の卓越する状況は、完形品（原石の長さを残すもの）の少ないこととあわせて、製作工程初期の剥離段階における欠損率の高さを示唆しているといえよう。

３．塩屋石柱状節理原石（第13図：第14表）

柱状節理を呈する塩屋石の原石は、総数28点が出土した。長さは、20～30㎝程度のものが多くみられ、塩屋石製石棒に比較して長いものが多い。これらは、石棒の未製品と断定できないものであるが、端部の折れ面に複合剥離がみられるもの（第13図１・２）や、端部調整とも考えられる剥離がみられるもの（同３）を含んでいる。このような剥離をもつものは、人工品と判断することが難しく、露頭から崩落したときに生じた擬石器の可能性もあることから、原石として分類した。層毎では、第Ⅰ・Ⅱ層から15点、第Ⅲ層から８点、第Ⅳ・Ⅴ層から５点が出土している。

註（１）　分類にあたっては、次の論文（南山大学人類学科学士論文）を参考とした。
近藤千晴、1993：『石棒製作址の研究－岐阜県宮川村・塩屋金清神社遺跡－』.

第12表　独鈷石計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	遺存状態	石　質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	O22	Ⅳ層	1/3 欠損	凝灰岩	(10.9)	5.3	3.3	(261)	第12図9

第13表　塩屋石製石棒計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	形態分類	遺存状態	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	N25	Ⅳ層	Ⅰa	軸部破片	(10.2)	(4.8)	(2.5)	(169)	
2	N25	Ⅳ層	Ⅰb	軸部破片	(4.3)	(5.7)	(2.1)	(52)	
3	N′22	Ⅱ層	Ⅳd	頭部片	(12.5)	(3.7)	(2.9)	(215)	第12図8
4	N′22	Ⅱ層	Ⅰa	軸部破片	(10.0)	(5.6)	(2.5)	(186)	
5	O22	Ⅰ層	Ⅰa	軸部片	(10.1)	(7.8)	(6.0)	(759)	
6	O22	Ⅱ層	Ⅰb	軸部片	(18.0)	(7.1)	(5.9)	(820)	同4
7	O25	Ⅳ層	Ⅱb	軸部破片	(8.0)	(6.7)	(2.9)	(172)	
8	O25	Ⅴ層	Ⅰa	端部片	(8.6)	(6.0)	(5.6)	(340)	同1
9	O′22	Ⅲ層	Ⅰa	軸部片	(22.8)	(10.0)	(6.0)	(1380)	
10	O′22	Ⅳ層	Ⅰa	軸部片	(25.9)	(8.6)	(5.5)	(2040)	
11	O′25	Ⅴ層	Ⅰd	軸部片	(8.3)	(4.5)	(4.3)	(223)	
12	P′25	Ⅲ層	Ⅰa	軸部片	(12.7)	(7.2)	(6.4)	(723)	
13	Q20	Ⅰ層	Ⅰd	完形	27.5	5.5	4.1	625	同5
14	Q20	Ⅰ層	Ⅰa	軸部片	(20.6)	(7.4)	(5.3)	(1020)	同3
15	Q′25	Ⅰ層	Ⅰa	軸部片	(12.6)	(6.8)	(4.6)	(602)	
16	Q′25	Ⅴ層	Ⅰa	軸部片	(19.6)	(6.5)	(4.9)	(1100)	同2
17	表面採集	—	Ⅰc	軸部片	(9.9)	(6.6)	(4.6)	(347)	同7
18	表面採集	—	Ⅱb	端部片	(17.9)	(7.7)	(5.9)	(1000)	同6

第14表　塩屋石柱状節理原石計測値一覧表（単位cm・g、カッコ内現存値）

番号	出土区	出土層位	端部の剥離の有無	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1	M′23	Ⅰ層		15.6	5.8	2.8	341	
2	M′23	Ⅰ層	○	12.2	7.5	6.4	804	
3	M′23	Ⅲ層	○	16.9	6.5	5.9	722	
4	N25	Ⅱ層		14.0	6.7	4.9	758	
5	N25	Ⅳ層		12.7	6.7	4.1	320	
6	N′22	Ⅱ層	○	36.2	8.1	7.5	2460	第13図2
7	N′25	Ⅲ層		6.9	3.9	3.1	100	
8	N′25	Ⅴ層	○	22.0	8.6	6.6	1780	
9	O22	Ⅰ層		15.6	7.7	6.4	826	
10	O22	Ⅱ層	○	13.6	8.3	5.0	822	
11	O22	Ⅱ層	○	22.4	8.6	7.6	2260	同3
12	O22	Ⅱ層	○	23.6	9.8	9.2	3260	同1
13	O25	Ⅲ層		26.3	6.2	3.8	1020	
14	O25	Ⅲ層		19.9	5.9	4.3	595	
15	O25	Ⅲ層		12.7	6.2	3.6	317	
16	O25	Ⅳ層		22.9	7.0	3.5	717	
17	O′22	Ⅲ層	○	19.7	9.7	5.2	1120	
18	O′22	Ⅲ層		14.1	8.5	6.9	734	
19	O′22	Ⅲ層		18.0	6.2	4.6	528	
20	O′25	Ⅰ層		15.7	6.6	4.3	503	
21	O′25	Ⅳ層		16.0	5.5	5.7	677	

22	Q19	V層	29.4	8.8	6.4	1980
23	Q20	I層	25.3	7.3	6.5	1580
24	Q22	I層	22.0	8.7	7.7	1400
25	表面採集	—	20.4	11.6	8.5	2040
26	表面採集	—	33.5	9.0	7.1	3420
27	表面採集	—	6.7	4.3	3.0	208
28	表面採集	—	11.0	8.4	5.1	623

第４節　その他の遺物

縄文土器・石器・石製品のほか、中世および近世の陶器・銭貨がごく少量出土した。いずれも第Ⅰ・Ⅱ層から出土している。

塩屋金清神社遺跡の背後に所在する山には、塩屋城の伝承があるが、空堀などの遺構は、まったく確認されていない。言い伝えでは、山が崩壊してなくなったともいうが、定かではない。

塩屋城は、塩屋筑前守秋貞によって、永禄・天正年間頃（16世紀後半）に築城されたと伝承されている。

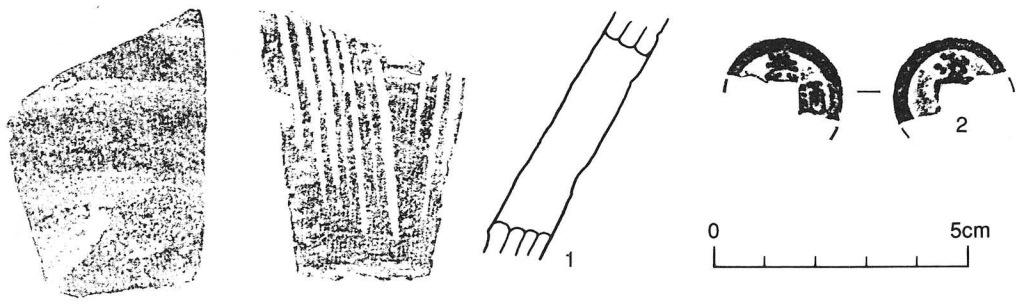
今回出土した陶器・銭貨は、塩屋城の存在を直接示すものではないが、伝承される築城年代の前後に人々の往来があったことを示している。

１．陶器

いずれも小破片であり、器形を復元できるものはない。Ｐ25区第Ⅱ層から中世の珠洲焼摺鉢（第14図１）が出土している。第Ⅰ層からは、肥前系の染付け碗など近世に属す陶磁器の小片、第Ⅱ層からは、古瀬戸、鉄釉天目碗とみられる陶器の小片が出土している。

２．銭貨

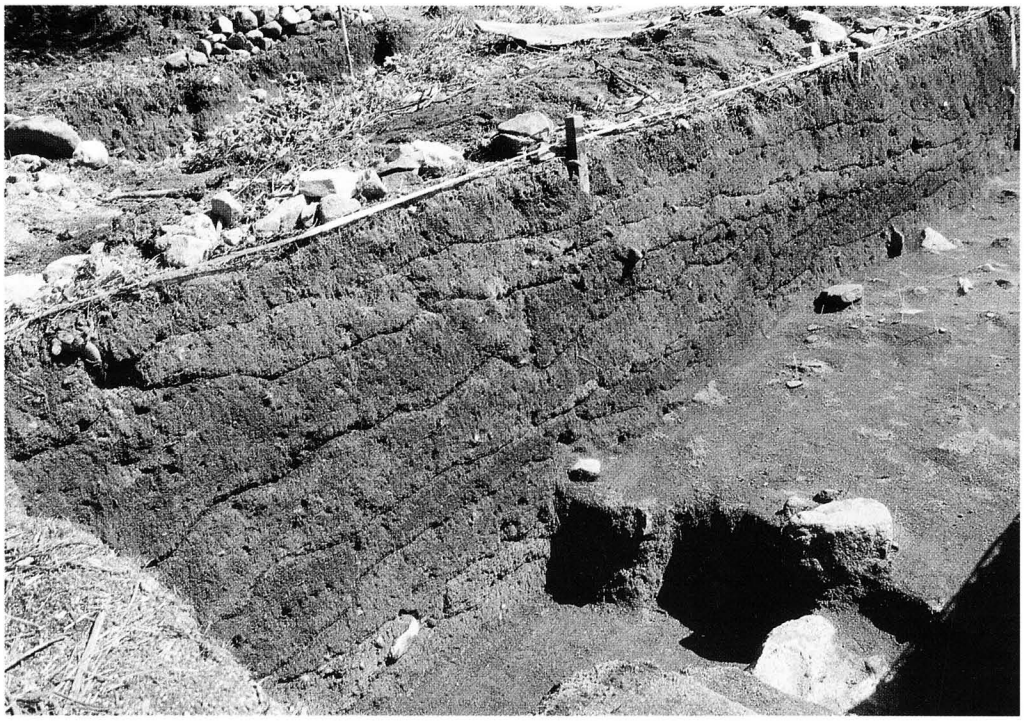
Ｑ25区第Ⅰ層から洪武通宝１点（第14図２）が出土している。$\frac{1}{2}$を欠損するが、背には「治」の字がみられ、日本製の模鋳銭と判断される。鹿児島県姶良郡加治木村で鋳造された加治木洪武である。鋳造年代は、概ね16～17世紀頃とされる。



第14図　陶器（１）・銭貨（２）拓影

上：調査区遠景（西対岸より）
下：調査区近景（西より）

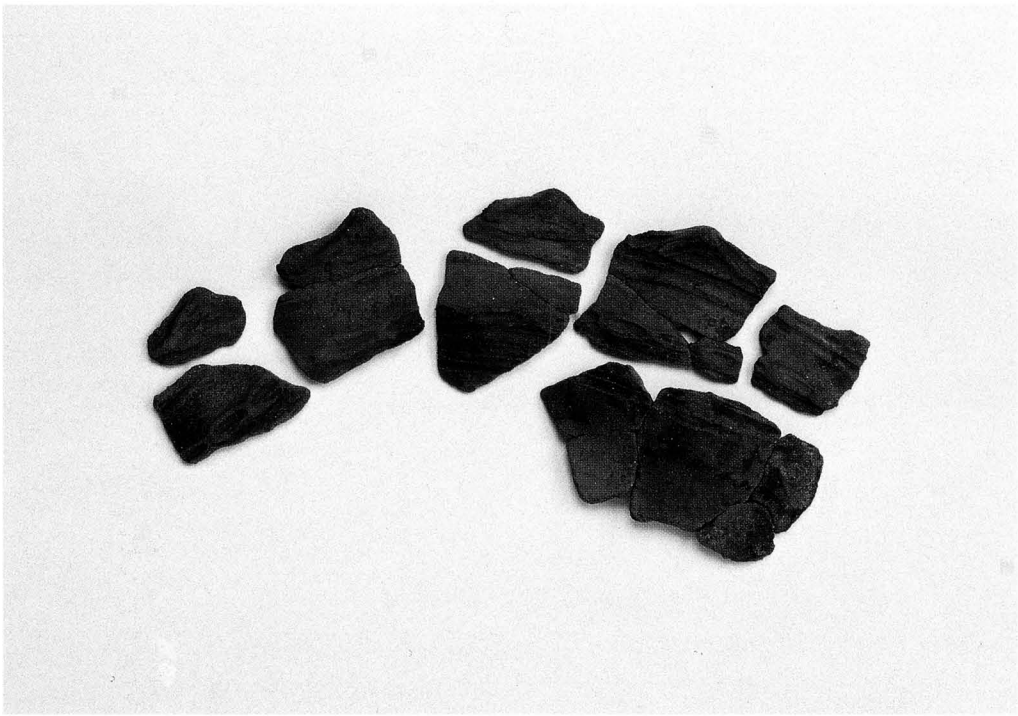
図版二



上：セクション（25列トレンチ南端：西より）
下：セクション（25列トレンチ北端：西より）

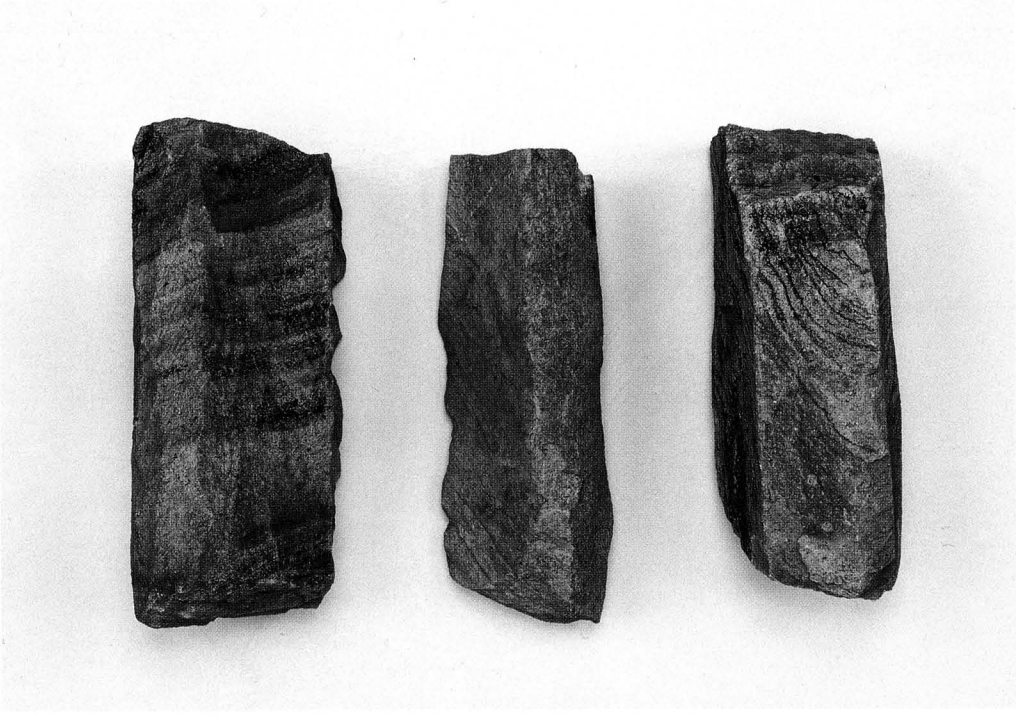
上：調査区風景
下：独鈷石出土状況

図版四



上：縄文土器（Ⅳ期深鉢）
下：敲石

図版五



上：塩屋石製石棒
下：塩屋石柱状節理原石

報告書抄録

ふりがな	ぎふけんよしきぐんみやがわむら　しおやきんせいじんじゃいせきびーちてん はっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	岐阜県吉城郡宮川村　塩屋金清神社遺跡Ｂ地点発掘調査報告書
副 書 名	村内遺跡発掘調査報告書
編集者名	河野典夫、小島　功
編集機関	宮川村教育委員会　埋蔵文化財調査室
所 在 地	509-4533　岐阜県吉城郡宮川村大字塩屋100番地 飛騨みやがわ考古民俗館内　TEL0577-62-3251
発行年月日	西暦1999年３月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
塩屋金清神社 遺跡Ｂ地点	岐阜県吉城郡宮川村 大字塩屋字宮ノ上	市町村 624	遺跡番号 00036	36度 23分 24秒	137度 11分 16秒	93.8.26 ～ 93.9.27	92㎡	石棒製作址の範囲確認調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物	特記事項
塩屋金清神社遺跡Ｂ地点 （宮ノ上遺跡）	散布地	縄文	なし	縄文土器（後期～晩期）、石器類、独鈷石、塩屋石製石棒、塩屋石柱状節理原石	縄文時代晩期の包含層を確認

岐阜県吉城郡宮川村

塩屋金清神社遺跡Ｂ地点
発掘調査報告書

宮川村内遺跡発掘調査報告書

発行者　宮川村教育委員会
発行日　平成11年３月30日
印刷者　㈲村坂印刷